

主体的・協働的・創造的な歌唱指導法に関する研究Ⅱ

A Study of independent, collaborative, and creative singing teaching methodes Ⅱ

橋 本 エリ子

Eriko HASHIMOTO

音楽教育研究ユニット

(令和4年9月30日受付, 令和4年12月20日受理)

I 緒言

今日の教員養成大学の学生において, 小学校及び中学校の歌唱共通教材について既習している学生が極めて少ないという嘆かわしい状況にある。

これまで, 筆者が担当する大学の授業「音楽科指導法」や「音楽科実技指導」では, 歌唱共通教材の作品をほとんどの学生が聴いたことがない, 歌ったことがないという回答であった。

残念なことに, 音楽の授業の中で, 教科書の他の教材が優先され, 文部省唱歌や日本古謡, そしてわらべ歌などを知り, 歌う機会を経験することなく今日に至ったと推測される。

平成29年度告示の学習指導要領において, 歌唱共通教材の各学年で取り扱う曲数についての変更は, 全くない。教科書では, 「我が国のよき音楽文化を, 世代を超えて受け継がれるようにする」^{注1} という意義を踏まえ, 小学校では, 各学年ともに歌唱共通教材のすべてを「こころのうた」と位置づけ, 弾力的な扱いができるように配置している。

今回の学習指導要領では, 生涯にわたり学習する基盤が培われるよう, 音楽科の目標及び内容が, 育成を目指す資質・能力の三つの柱, つまり基礎的な「知識及び技能」の習得, 課題を解決するために必要な「思考力, 判断力, 表現力等」の育成, そして学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力, 人間性等」の涵養に沿って再整理された。

また, 知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」を育むことを目指すに当たっては, 各教科等

の指導を通して教育活動の充実を図るよう, どのような資質・能力の育成を目指すのかが明確化された。

そして, 「子供たちにどのような力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え, 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を図る, 「指導と評価の一体化」の必要性が明確となった。

つまり, 児童・生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うと同時に, 評価の場面や方法を工夫して, 学習の過程や成果を評価することを示し, 授業の改善と評価の改善を両輪として行っていく必要性が明示されている。

この指導と評価の一本化を図るために, 児童・生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視し, 教師が自らの指導のねらいに応じて, 授業での児童・生徒の学びを振り返り, 学習や指導の改善に生かしていくことが求められている。^{注2}

即ち, 今回の学習指導要領改訂の趣旨を実現するためには, 学習評価の在り方が極めて重要であり, 学習評価を真に意味あるものとし, 指導と評価の一本化を実現することが期待されている。

従って, 児童・生徒の学習改善につながるものにしていくこと, そして, 教師の指導改善につながるものにしていくことが極めて重要と言えよう。

本研究では, 児童・生徒の主体性を育む歌唱指導法について研究することにより, 「自分で考える力」を身に付ける授業プログラムを構築するこ

とを目的としている。

児童・生徒の主体性を育む歌唱指導法について、小学校の歌唱共通教材を詳細に分析し、研究を深めることにより、「自分で考える」力を身に付ける歌唱指導法を提案し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行う。

本稿では、児童・生徒が学習の主体となる主体的・協働的・創造的な歌唱指導法に関する研究を進めることにする。

Ⅱ. 歌唱共通教材を学習する意義

学習指導要領に歌唱共通教材を設けている意義は、「我が国で親しまれてきた唱歌や童謡、わらべうた等を、子供からお年寄りまで世代を超えて共有できるようになることにある。」^{注3}としている。

また、わが国で長く歌われ親しまれてきた“うた”を取り扱うことは、わが国のよき音楽文化を受け継いでいく意味からも大切である。

そのような“うた”が更にとりあげられるように、これまで学年ごとに4曲示してきた楽曲の中から、第1学年から第4学年までは4曲すべてを取り扱うこととし、第5学年及び第6学年は4曲中3曲を含めて取り扱うこととなった。

また、教科書では、こうした我が国のよき音楽文化を、世代を超えて受け継がれるようにする意義を踏まえて、各学年とも歌唱共通教材すべてを下記の通り、「こころのうた」と位置づけ、弾力的な扱いができるように配置している。

表1. 【小学校における歌唱共通教材】

学年	曲名	
1 学年	「うみ」	文部省唱歌
	「かたつむり」	文部省唱歌
	「日のまる」	文部省唱歌
	「ひらいたひらいた」	わらべうた
2 学年	「かくれんぼ」	文部省唱歌
	「春がきた」	文部省唱歌
	「虫のこえ」	文部省唱歌
	「タヤケコヤケ」	
3 学年	「うさぎ」	日本古謡
	「茶つみ」	文部省唱歌
	「春の小川」	文部省唱歌
	「ふじ山」	文部省唱歌
4 学年	「さくらさくら」	日本古謡
	「とんび」	

	「まきばの朝」	文部省唱歌
	「もみじ」	文部省唱歌
5 学年	「こいのぼり」	文部省唱歌
	「子もり歌」	日本古謡
	「スキーの歌」	文部省唱歌
	「冬げしき」	文部省唱歌
6 学年	「越天楽今様」	日本古謡
	「おぼろ月夜」	文部省唱歌
	「ふるさと」	文部省唱歌
	「われは海の子」	文部省唱歌

このように、各学年の歌唱の指導に当たっては、我が国や郷土の音楽に愛着がもてるよう、共通教材のほか、長い間親しまれてきた唱歌、それぞれの地方に伝承されているわらべうたや民謡など日本のうたを取り上げるようになっている。

歌の場合は、歌詞のもつ意味がその楽曲のイメージに与える影響は強いものがある。特に、日本の風情や情緒を見事に表現している歌唱共通教材を指導する際には、言葉一つ一つの発音や意味などを十分に指導する必要がある。そして、日本語の持つ語感の美しさや素晴らしさ、季節感を味わいながら、日本の歌としていつまでも人の心に残るように、歌い継いでいくように指導していくことが重要と言えよう。

Ⅲ. 美しい日本歌曲の歌唱法と明確な発音法

学習指導要領では、「自分の歌声及び発音に気を付けて歌うこと」「呼吸及び発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない、響きのある歌い方で歌うこと」が求められている。

教師は、児童・生徒に対して、呼吸法、自然で無理のない発声法、声に響きを付ける方法、美しい日本語の発音の仕方について指導できることが必要である。

美しい日本歌曲の歌唱法は、第1に柔軟な発声と第2に明確な日本語の発音、そして第3に心のこもった歌い方と言えよう。

つまり、身体や下顎の硬い発声法をしている場合は、明瞭に発音できない。また、楽な発声法をしている場合でも、母音や子音が不明瞭な場合は、歌詞が聴き取れない場合が多い。つまり、心の中でどんなに歌を感じていても、説得力がなく、聴く人の心を動かすことはできないだろう。

第1に良い姿勢、第2に正しい呼吸法、第3に良い響きを心掛けることが重要である。

さらに、明確な発音が必要で、5つの母音（ア、イ、ウ、エ、オ）は、口腔内を広く開け、舌の力

を柔らかくすることが大切である。

日本歌曲の最も数多く現れる「ア」の母音は、特に発音が難しく、喉声で歌っている場合が多くみられる。つまり、「ア」の発音の際に、下顎を下げて発音しているのである。

「ア」を発音する場合は、特に上顎の共鳴に気を付けて、充分に口の中を開けるなど研究する必要がある。口型は、ア、エ、イが横型、オ、ウは縦型を心掛ける。

次に、子音の発音であるが、表2.に示す通り、明瞭かつ鋭敏に発音できるよう訓練する必要がある。

表2. 【子音の発音の仕方】

カ行 (K)	カ・キ・ク・ケ・コ Ka・Ki・Ku・Ke・Ko	咽頭を使って発音する。
サ行 (S)	サ・シ・ス・セ・ソ Sa・Shi・Su・Se・So	無声音のSに時間をかける。
タ行 (T)	タ・チ・ツ・テ・ト Ta・Ti・Tu・Te・To	上歯の裏側に舌端を接触させて、はじき出す。
ナ行 (N)	ナ・ニ・ヌ・ネ・ノ Na・Ni・Nu・Ne・No	唇を軽く閉じて発音する。
ハ行 (H)	ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ Ha・Hi・Hu・He・Ho	咽頭を使って発音する。
マ行 (M)	マ・ミ・ム・メ・モ Ma・Mi・Mu・Me・Mo	上下の唇をきつく合わせて発音する。
ヤ行 (Y)	ヤ・イ・ユ・エ・ヨ iya・iyi・iyu・iye・iyo	「イ」を頭につけて発音する。
ワ行 (W)	ワ・イ・ウ・エ・オ uWa・uWi・uWu・uWe・uWo	「ウ」を頭につけて発音する。
ガ行 (G)	ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ nga・ngi・ngu・nge・ngo	「ン」を頭につけて発音する。
ダ行 (D)	ダ・ヂ・ヅ・デ・ド nda・ndi・ndu・nde・ndo ンヂ・ンヅ	「ン」を頭につけて発音する。
パ行 (P)	パ・ピ・プ・ペ・ポ Pa・Pi・Pu・Pe・Po	上下の唇を合わせて発音する。
バ行 (B)	バ・ビ・ブ・ベ・ボ Ba・Bi・Bu・Be・Bo	上下の唇を合わせて発音する。

Ⅳ. 身体全体を楽器として意識する呼吸法

歌う前に身体全体の筋肉を緩めることは、発声法ではとても大切なことである。

そこで、発声を行う前に、必ず5分間下記の体操を行うことで、歌う前に筋肉の緊張を解き、心身共にリラックスさせる必要がある。

この全身の筋肉の弛緩によって、咽喉内の筋肉とそれに付随する筋肉も緩めることができる。

【ウォーミングアップの7つの体操】

- ①深呼吸
- ②首の脱力
- ③首の腕の脱力
- ④首、腕、ひざの脱力
- ⑤上半身の脱力
- ⑥全身の脱力
- ⑦手と足首の脱力

そして、発声や歌唱中には、下記の図1.に示す通り、体の感覚と使い方をイメージすることが重要である。

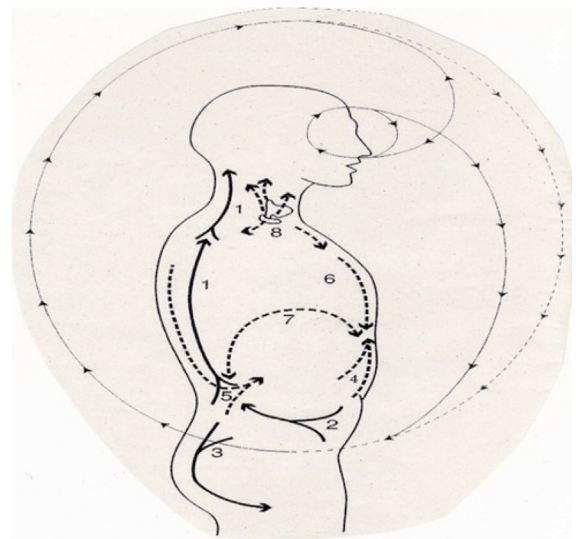


図1. 歌う時の体の感覚と使い方

- 1 番：背筋と首の後ろの頸部を伸ばす。
- 2 番：腹筋を身体内部及び上方部へ支える。
- 3 番：臀筋（でんきん）から腹部を支える。

図1.の示すように、横隔膜はゴムバンドのように広がり、横隔膜は、歌唱中、フレーズの終わりまで身体前腹部を押し付けるように強力に働きかける必要がある。

また、骨盤筋は、身体内部、及び上方部に緊縮し、腹部を支える。後方筋（殿筋）は上方部に緊縮し、腹部を支えることが重要である。

毎日の練習においては、姿見などで姿勢や顔の表情をチェックしながら、下記の5つの項目を守りながら、“歌う為の体”を作ることが大切である。

【歌うための体作りの5つのチェックポイント】

- ①声が出る仕組みを知る。
- ②正しい姿勢をキープする。
- ③腹式呼吸を知る。

④歌うための呼吸を練習する。

⑤呼吸法のトレーニングを毎日行う。

さらに、声はどのようにして作られるのか？という「声が出る仕組み」を理解することが必要である。

つまり、声は、図2.に示す通り、声帯という2枚の薄い肉片が振動することによって作られる。この2枚の声帯がくっつき合った状態のときに、肺から空気が送られると、声帯が振動して声となる。

呼吸しているとき 声を出しているとき

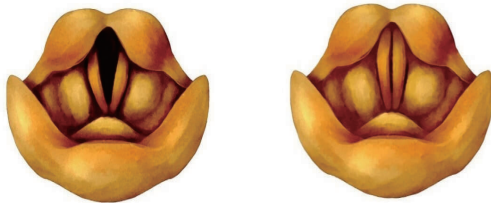


図2. 声帯

従って、吐いた息は、多くの器官に振動・共鳴して声になる。声は、閉じた声門にあたった息の振動から生まれるということである。

また、小学校高学年頃から、話し声が低くなることもある。つまり、変声期になると特に、男子は1オクターヴぐらい低くなる。その為、中学生になると、女声と男声からなる混声合唱の形態で歌うようになる。この時期には、授業の中でも高い音域を避けるなどの配慮をすることが何よりも大切である。

この声変わりの原因となるものは、①軟骨の成長②声帯の長さや厚みの変化によるもので、個人差はあるが、声が落ち着くまでに3カ月から1年ぐらいはかかることがある。従って、変声期の間は、声が出にくくなることがあるので、慌てず、無理をしないようにする。

次に、男女の声の高さが異なる理由としては、一般的に声門の長さによって決まる。

つまり、男女の声の高さの違いは、声門の長さの違いであり、女性や子供は、1.5センチ、成人男性は、2.5センチと言われている。この変声期の間は、声が出にくくなることがあるので、慌てず、なるべく無理をしないようにする。授業の中でも高い音域を避けるなどの配慮をすることが何よりも大切である。

V. 共鳴腔を生かした美しい響きの歌唱法

正しい発声を行うためには、正しい姿勢を取ることが必要である。そして、正しい呼吸法の構えができると、正しい呼吸によって共鳴に必要な開かれた咽喉、力の抜けた咽喉の状態が作られ、正しい呼吸法の上に、共鳴に必要な諸器官を良い状態に保ち、豊かな声として響かせることができる。

次に、共鳴するためには、空間が必要となる。人体の中にも空洞があり、体の中にある空洞部分が、共鳴腔（きょうめいくう）である。

共鳴腔は、声帯の振動音が、体内にある空洞部分で反響して大きな音になる。主な共鳴腔は、図3.の示す通り、口の奥にある咽頭腔（いんとうくう）、鼻の中にある空洞部分の鼻腔（びくう）、そして口の中にある空洞部分である口腔（こうくう）が挙げられる。

その他、図4.の前頭洞、篩骨洞、蝶形骨洞、上顎洞を含めて共鳴させることが重要である。

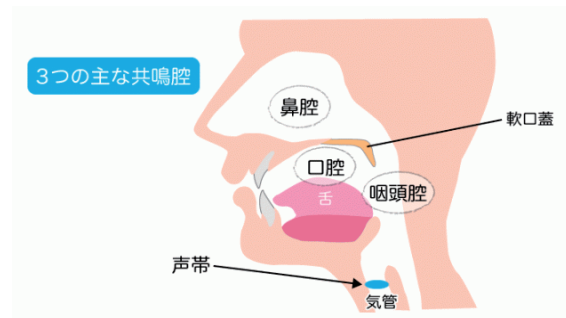


図3. 共鳴腔（咽頭腔、鼻腔、口腔）

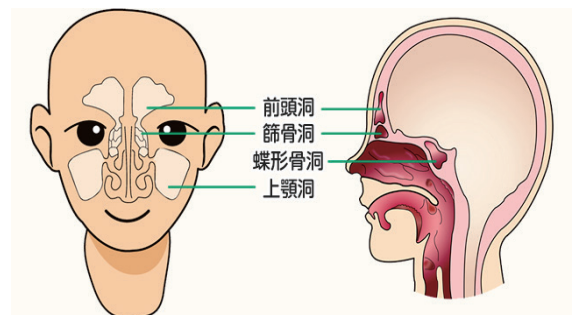


図4. 前頭洞、篩骨洞、上顎洞、蝶形骨洞

従って、下記の8つのポイントに注意しながら発声練習を行うことで、美しい響きの声を体得することが可能となる。

【美しい響きの声を体得する8つのポイント】

①あくびの声で発声をする。

- ②声があたるツボを見つける。
- ③口の中を広く開けて、声を響かせる。
- ④フェイストレーニングで顔の筋肉を鍛える。
- ⑤声の響きをキープしながら歌う。
- ⑥母音と子音をはっきり発音する。
- ⑦ハミングで声の響きを確認する。
- ⑧いつも発声に注意して、声の響きをキープする。

①番の「あくびの声で発声する」と、のどが開き、力まず自然に発声することができる。また、あごの力を抜くことを忘れないようにする。

「のどを開く」とは、「口の奥のスペースを広く確保する」ということで、のどの開いた状態で息を吸うと口の奥まで空気が届き、美しい響きの声で歌うことができる。そして、舌の力を抜くことがとても重要である。

次に②番の「声があたるツボ」を見つけることが大切である。図5.に示す通り、眉と眉の間の前頭洞に当てるイメージをもつ。

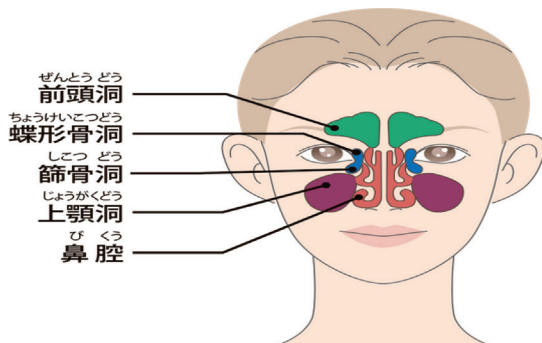


図5. 前頭洞、蝶形骨洞、篩骨洞、上顎洞、鼻腔

前頭洞は、前頭骨にある空洞で、眉弓の後方に位置する副鼻腔の一つである。

従って、なるべく顔面に声を集めて、眉と眉の間（前頭洞）から声を出すようなイメージをもつことが大切である。また、口を閉じて、ハミングで声を出し、声が響く場所を見つけることができる。その際、声があたる場所を実感するために、スタッカートで声を出してみる練習が効果的である。

前頭洞に声を当ててみることで、声があたるツボ（音の集まる焦点）を見つける。このツボに上手く当てることができれば、響きの良い声を発見することが可能となる。

また、声があたるツボ（音の集まる焦点）を見つけることで、柔らかい音色の声を表現することができるようになる。

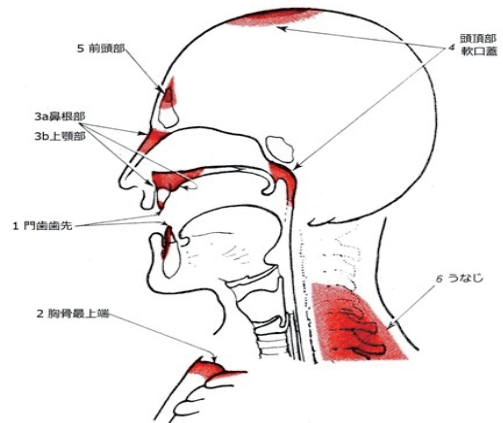


図6. 声があたるツボ

図6. に示す通り、顔の中には、声がよく響くツボがある。その番号に示す声の当たる場所によって、明るい声や暗い声、硬い声や柔らかい声、さらに軽い声や重い声、細い声や太い声など響きの感じが変わるので、自分で色々な響きを確認しながら、一番楽に響く声があたるツボを見つけることが重要である。

そして、声が高くなるほど、共鳴点が口の奥へ移っている。声の共鳴を知覚する所、すなわち声を当てるポイントが、高音域になるにつれて頭部に移っていくことを理解し、体得することが重要である。

そして、③番の口の中を広く開けて、声を良く響かせることが大切である。声を響かせるためには、口の中の空間を広く開けること、そして唇よりも口の奥の方を開ける意識を持つことが大切である。

つまり、口の中の空間を作るためには、口を縦に開けることがポイントである。そして、軟口蓋を上げて、声を前方の硬口蓋に当て、犬歯のあたりを意識することにより、顔面を通して明るい声を出すことが可能となる。その際、なるべく声を前に飛ばす気持ちになることが重要である。

④番のフェイストレーニングで顔の筋肉を鍛えることにより、美しい響きの声を出すことができる。

顔面には、図7. に示す通り、発声と関係の深い重要な筋肉がある。

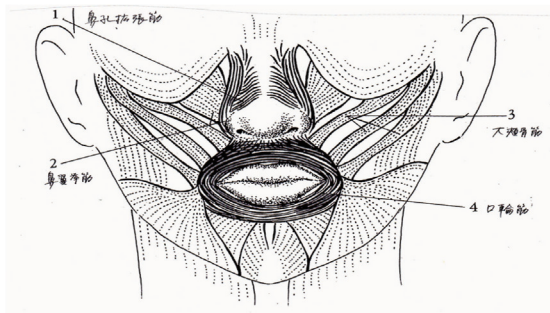


図7. 表情筋

- | | |
|---------------|---------|
| 1. 鼻孔拡張筋 | 3. 大頬骨筋 |
| 2. 鼻翼挙筋・上唇方形筋 | 4. 口輪筋 |

従って、フェイストレーニングで、下記の2つのポイントを注意ながら顔の筋肉を鍛える。

1. 両顎の付け根から力を抜き、顎がないように感ずることが重要である。
2. 舌根は、力を入れることなく口の中で平らに安定する。(言語形成や声の共鳴に直接関係がある顔の優しい保持＝声の柔らかい響き)

⑤番の声の響きをキープしながら歌うことが重要で、上顎の口蓋垂に息を当てるようにして声を出す。

つまり、きれいに響く声は、響きが下がらない声のことであり、鼻の下に手を当てて、声を上に出す練習をすることにより、体で響きを覚えるようにする。

さらに、息をたっぷり使って、響きの豊かな声を出せるようになったら、その響きを保つ練習を行う。

この声の響きを保つことにより、正しい音程で歌うことができるようになる。

⑥番の母音と子音の特徴を知って練習することで、美しい日本語で歌うことが可能となる。

つまり、サ行の「さ・し・す・せ・そ」は、無声音の“S”をやや多めに加えることで、子音をはっきりと発音することができる。

また、ハ行の「は・ひ・ふ・へ・ほ」も、子音の“H”に時間をかけることにより、明瞭な発音で言葉を伝え、表現することが可能となる。

次に、ヤ行の「や・い・ゆ」は、少し“い”の発音を加えることで、“いや”“いゆ”“いよ”できれいな日本語で伝えることができる。

また、ナ行の「な・に・ぬ・ね・の」は、“ん”のハミングの時間をとることで、nNa, nNi, nNu, nNe, nNo と美しい響きの発音が可能となる。

次の⑦番は、ハミング唱法により声の響きを確

認することで、美しい響きの声を体得することが可能となる。

響きのある声を見つけるためには、ハミングの練習が最適である。但し、ハミングをする際に、必ず口の奥を開いた状態を確保し、鼻腔の響きをミックスすることが重要となる。

⑧番のいつも発声に注意して、声の響きをキープすることが大切である。同じ音をロングトーンで美しく歌うことが、美しい発声を習得する近道である。また、ロングトーンは、腹筋の練習や美しい音色づくりにも効果的な練習となる。

最後に、お腹だけでなく、背中や腹筋も含め、身体全体が広がったイメージで息を吸うことが重要である。つまり、背中にも後頭部にも顔があるような感じで、表情もゆるめて、あくびをするように吸うことが大切と言えよう。

Ⅵ. 「資質・能力」を高める小学校の歌唱共通教材

低学年の児童は、歌うことが好きで、歌詞の表す場面や情景を想像しながら歌ったり、自然に体を動かしたりして歌ったりする傾向がある。

従って、自分の歌声や発音に気を付けて歌う技能、互いの歌声や伴奏を聴いて声を合わせる技能などを身に付けつつ、表現を工夫し、思いをもって歌うことができるように指導を行う。

中学年の児童は、曲の雰囲気や旋律やリズムなどの特徴や歌詞の内容と関わらせ、歌詞の内容にふさわしい表現や友達と合わせて歌うことに意欲をもって取り組むようになっていたりする傾向がある。

従って、曲想と教材曲の構造や歌詞の内容との関わりに気付かせ、範唱を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりして歌う技能や、呼吸や発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない歌い方で歌う技能、互いの歌声や副次的な旋律、伴奏を聴いて、声を合わせて歌う技能などを身に付けつつ、曲の特徴を捉えた表現を工夫し、思いや意図をもって歌うことができるように指導する。

高学年の児童は、曲の雰囲気を様々な音楽を形づくっている要素や歌詞の内容と関わらせ、曲の特徴を理解し、それにふさわしい表現にして伝えようとしたり、合唱など、友達と合わせて歌うことに積極的に取り組むようになっていたりする傾向がある。

従って、曲想と教材曲の構造や歌詞の内容との関わりについて理解し、範唱を聴いたり、ハ長調やイ短調の楽譜を見たりして歌う技能や、呼吸や発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない響き

のある歌い方で歌う技能、各声部の歌声や全体の響き、伴奏を聴いて声を合わせて歌う技能などを身に付けつつ、曲の特徴にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって歌うことができるように指導する。

6年生の歌唱指導については、変声期についてその時の児童の実態に合わせて教材や歌い方を工夫する。

変声期に入ると、不安定で裏返る、高音がでなくなるなどの現象が特に男子にみられるようになる。

急に背が伸び、体格が大きくなる児童は、特に急激に変わるので注意が必要となる。

これらの変化が見られるようになったら、恥ずかしさや不安を取り除くこと、周りも理解し特別視しないことなど、精神面のケアを図るようにする。

また、調を下げ、1オクターヴ下を歌うなど、本人の可能な音域での配慮を行う。さらに、変声した児童が多いクラスでは、中学生向きの混声合唱を取り入れるなど、積極的に歌う心を妨げないように、配慮や工夫を行うことが大切である。

Ⅶ.「歌唱共通教材」における歌唱指導法

歌唱共通教材の指導に当たっては、日本語の響きや抑揚がどのように生かされて、楽曲の旋律が生み出されているかについて、十分に理解させることが重要である。

自然の美しさ、四季の豊かさを表現した楽曲の歌詞のもつ意味内容、そして日本語の響きや発音が、音楽的表現と直接的に結び付いているので、楽譜から読み解きながら、児童・生徒がその内容を十分に理解して、のびのびと歌唱表現できるように指導を行う。

作品の生まれた時代背景・歴史的背景を理解させながら、さらに音楽的な表現上の工夫や作曲者の意図を、児童・生徒自身に考えさせ、実際に歌唱表現をしながら学習内容を深めていくことが必要である。

〔第1学年〕

第1曲目「ひらいたひらいた」(わらべうた)

みんなであそびながらたのしくうたいましょう

わらべうたは、子どもたちの日常生活や遊びのなかで継承されてきた歌で、日本には数百種類以上あると言われている。

「ひらいたひらいた」は、江戸時代の後期頃から、“輪遊びのうた”として歌い継がれている。

歌詞に出てくる「れんげのはな」は、「れんげ

草」ではなく、「蓮の花」のことで、この作品では、花の様子を思い浮かべながら、あるいは輪になって遊びながら歌う楽しさを味わうことができる。

曲の特徴としては、旋律がミ・ソ・ラ・シ・レの5音からなっており、曲の前半はミ・ソ・ラの音を中心に、また後半ではラ・シ・レの音を中心に形成され、最後はラの核音で終止している。

4分の2拍子。前半6小節は、最初の2小節が変形反復され、後半は、2小節と4小節に分けられる。

- | | |
|--------------------|-------------|
| 「ひらいたひらいた」 | 身体の動き方 |
| 1. ひらいた ひらいた | 【左回りに歩く】 |
| なんの はなが ひらいた | |
| れんげの はなが ひらいた | |
| ひらいたと おもったら | |
| <u>いつのまにか つぼんだ</u> | 【中心に向かい座る】 |
| だんだん弱く | |
| 2. つぼんだ つぼんだ | 【立って右回りに歩く】 |
| なんの はなが つぼんだ | |
| れんげの はなが つぼんだ | |
| つぼんだと おもったら | |
| <u>いつのまにか ひらいた</u> | 【左回りに大きく開く】 |
| だんだん強く | |

【発問】1番の歌詞の「いつのまにか つぼんだ」では、体の動きをどのように動くと良いでしょうか？また2番の歌詞の「いつのまにか ひらいた」は、どのような動きと声で歌うと良いでしょうか？

また、1番と2番の歌詞の違い、歌詞の表す様子と関わらせながらふさわしい強弱や速度などの歌い方を工夫し、歌詞に合わせて、どのように歌うかや、どのように遊ぶかを考えて歌うことが重要である。

指導のポイントは、「音楽に合わせて歩く」ことを生かして、遊ぶことを楽しみながら表現すると良い。

友達と円をつくり、歌詞に合わせて開いたり、つぼんだりする活動は、とても魅力的な活動であり、また、開いたときの解放感、つぼんだときの寂寥感を、歌声で表現できるように指導することが大切である。

教材としては、実際に手を繋ぎ、輪になって1番の歌詞では花が開くように左回りに開きながら、最後の小節「いつのまにかつぼんだ」で、

ゆっくりと花が閉じるように、中心に向かって輪を小さくしながら座る。また、2番の歌詞では、立ち上がって小さい輪のまま右回りに歩き、「いつのまにかひらいた」では、ゆっくり広がって輪を大きくし、両手を一杯にひろげて歌う。そして、少しゆっくりと終わることも演奏効果が上がる。

この作品では、花の様子を思い浮かべながら歌えるように、またグループや学級全体で、身体全体を使って動きながら歌うことで、友達と一緒に歌い、また合わせる歌の楽しさを感じ取ることが可能となる。

さらに、手のひらで、花が開いたり、閉じたりする様子を表し歌うことで、一人一人が表現する身振り遊びでも楽しむことができる。

第2曲目「かたつむり」(文部省唱歌)

かたつむりによびかけるようなきもちでうたいましょう。ハ長調、4分の2拍子。

「かたつむり」 小三部形式

- | | |
|--|----------------------|
| 1. でんでん むし むし
かたつむり
おまへの あたまは
どこに ある
<u>つの だせ やり だせ</u>
あたま だせ | a

a'

b |
| 2. でん でん むし むし
かたつむり
おまへの めだまは
どこに ある
<u>つの だせ やり だせ</u>
めだま だせ | a

a'

b |

【発問】「“おまへのあたまはどこにある”は、どのような声で歌うと良いでしょう?」「“つのだせ やりだせあたまだせ”は、どのように歌うと良いでしょう?」

上記の問いに対して、児童が色々な活発な意見を出し合うことで、この作品をどのように歌いたいか? またどのように工夫して歌うと良いか、意見を自然に取り入れ、児童の力で、表現の工夫を行う。

第一連は、「おまへのあたまはどこにある?」かたつむりに話しかけるように歌い、第二連の「つのだせ やりだせ、あたまだせ」では、かたつむりに話しかけるように歌うと良い。

「つのだせやりだせあたまだせ」は、どのように歌うとよいでしょう?」では、親しみをもって、やさしく、呼びかけるように歌うと良い。(決してどならないように歌うことが大切である。)

作品は、a a' b の小三部形式の曲で、フレーズごとに歌詞の表す様子に変化する。

第1フレーズ a・第2フレーズ a' では、同じリズムパターンが何度も繰り返される。

第3フレーズ b では、♩ ♩ が中心であるが、最後は、最初のリズムの付点8分音符と16分音符のリズムで締めくくられ、統一感が保たれている。

教材として、弾む付点8分音符+16分音符のリズムを、カスタネットでリズム練習することにより、楽譜通りに、歌いやすい2拍子に乗ることができる。

かたつむりの「つの」は触覚であり、かたつむりの「めだま」は「つの」の先端についている。かたつむりは、障害物に触れると触覚を引っ込める習性があるので、「かたつむり」の歌詞の中で「つの」と呼ばれているものは、実は触角である。

図8. を見てわかるように、かたつむりには2対、4本の触角がある。大きく目立つのが大触角。その下に小触角が2本ある。



図8. かたつむりの大触覚と小触覚

また、歌詞の表す様子や気持ちと曲想との関わりに気づき、自分の発声や発音、楽器の音色に気を付けて表現する技術を身に付けることが望まれる。

歌詞に合わせて身振りを工夫させることによって、拍子を体全体で感じるができる。

指導のポイントは、拍やリズムに合わせて「身振り」をしながら、気持ちを込めて楽しく歌うことにある。

歌詞の情景から、友達と声を合わせて歌う喜び

と共に、歯切れのよい発音や明るい声などさらに歌い方の工夫を行うことが望ましい。

第3曲目「うみ」(文部省唱歌)

林 柳波作詞・井上武士作曲

うみのようすをおもいうかべながらうたいましょう。

ト長調 4分の3拍子 a-a'の一部形式

「うみ」

1. うみはひろいな おおきいな 「呼びかけ」
つきがのぼるし ひがしずむ 「こたえ」
2. うみはおおなみ あおいなみ 「呼びかけ」
ゆれてどこまで つづくやら 「こたえ」
3. うみにおふねを うかばせて 「呼びかけ」
いってみたいな よそのくに 「こたえ」

【発問】「海のどんな様子を表している歌でしょう？」(1番・2番・3番ごとに)

- | | | |
|------------------|-------|------|
| 1番： <u>海は広い</u> | 月が昇る、 | 日が沈む |
| 2番： <u>海の波</u> | 大波 | 青い波 |
| 3番： <u>海への憧れ</u> | 船 | よその国 |

歌詞の表す“ひろいな”“おおきいな”の海の情景を想像しながら「どんな歌い方で歌うとこの作品に合うと思いますか？」という発問により、曲想にふさわしい歌声をイメージして、旋律のもつリズム、3拍子の流れ、フレーズを意識しながら歌うように促す。

また、曲に合わせてカスタネットでリズム打ちをすることにより、旋律のリズムを捉える。

さらに、「どんな感じに体を揺らしたら、この曲に合うでしょう？」と発問をすることにより、曲に合わせて、体を揺らしながら歌うことも試みる。

つまり、海の情景を思い浮かべながら、3拍を一つのまとまりとして捉え、3拍子のゆったりした感じを表すような動きや3拍子の特徴を子どもの言葉から引き出すようにする。

緩やかな3拍子の流れを感じながら歌うために、体を揺らしながら3拍ずつのまとまりを感じて歌うことで、これまで学習してきた2拍子との違いに気付くようにすることも大切である。

全体が4小節ずつ二つの部分で構成され、その二つの部分の旋律は同じリズムで構成され、音高の進行は全く違っているが、まとまりを感じさせ

ている。

従って、ペアやグループで向かい合い、4小節ごとに「呼びかけ」と「こたえ」の4小節ずつを交互に歌うことにより、4小節の前半・後半が、繰り返しになっている同じリズムを正確に把握させることができよう。歌詞の情景を表す“つきがのぼるし、ひがしずむ”を想像し、海の広さを想像する“ひろいな”“大きいな”など、強弱の工夫に繋げるように指導を行うことが大切である。

第4曲目「ひのまる」(文部省唱歌)

高野辰之作詞・岡野貞一作曲

おとのたかさにきをつけながらうたいましょう。

4分の2拍子、ハ長調。

1911年(明治44年)「尋常小学唱歌(一)」で、当時の曲名は、「日の丸の旗」であった。

1941年(昭和16年)「国民学校芸能科ウタノホン(上)」では、「ヒノマル」の曲名で、文語体の歌詞であった。

「ヒノマル」

1. 白地に赤く 日の丸染めて
ああうつくしや 日本の旗は
2. 朝日の昇る 勢見せて
ああ勇ましや 日本の旗は

現在の共通教材としての歌詞は、口語体に改められた「尋常小学唱歌」の際のものである。

「ひのまる」

1. しろじに あかく ひのまる そめて
ああ うつくしい にほんの はたは
2. あおぞら たかく ひのまる あげて
ああ うつくしい にほんの はたは

全体が4小節ずつの4つのフレーズで構成され、同じリズムが繰り返されているため、旋律のまとまりを感じながら歌うことができる。また、旋律は、「ド・レ・ミ・ソ・ラ」の音で構成され、全てのフレーズが4分音符7つの同リズムで、歌詞の7字ずつのリズムに対応している。

教材としては、順次進行でなだらかに上昇する前半と、曲の山となる後半1段目やその後の下行など、旋律の特徴や歌詞の関わりに気付かせる。

音高や旋律の特徴を捉えるために、教科書では、ハ長調となっているが、歌唱教材としては、原調のヘ長調や変ホ長調で歌うことも試みる。

指導のポイントは、階名唱で歌う場合は、「ドレミの体操」で、音高を確かめながら歌わせると良い。

また、歌詞唱の際は、日の丸の旗が日本の国旗であることを理解させて、日の丸のひるがえる様子を思い浮かべながら、盛り上がる「曲の山」の箇所を見つけることで、歌い方を工夫するように促す。

【発問】子どもたちの興味や関心を高めるために「日本の国旗の特徴は?」「どのような時に、どのような場所で見かけるのかについて自由に話し合う。」「音が一番高くなる場所は、どこでしょう?」「みんなが一番歌いたくなる場所はどこでしょう?」と発問し、「それはどうしてなのか?」と理由付けも行い、考える力を育成する。そして、音が高いところが、旋律の盛り上がりになることを理解させることが重要と言えよう。

さらに、旋律と歌詞の関わりを考え、気付いたことを発表し合い、曲の山を意識して歌うように促す。

最初の4小節と次の4小節は、スタートの音は違うもののいずれも同音連打で上行していき、最後の小節のみ1音下行する形である。曲中で一番音高が高く盛り上がる3番目のフレーズに向かって、フレーズごとに上行形になっていることを意識させ、強弱や歌い方の工夫に繋げる。

3番目のフレーズは、「ああ うつくしい」と気持ちを表す言葉になっているが、曲の最高音が充てられている「ああ」の歌い方がポイントになる。

〔第2学年〕

第5曲目「かくれんぼ」(文部省唱歌)

林 柳波作詞・下総皖一作曲

かくれんぼであそんでいるようすをおもいうかべながらうたいましょう。

国民学校の教科書として文部省が発行した「ウタノホン(上)」に掲載された。

「かくれんぼ」

かくれんぼするもの よつといで
じゃんけんぽんよ あいこでしょ

mf「もう いいかい」(呼びかけ：鬼役)

mf「まあだだよ」(答え：隠れる子供)

f「もう いいかい」(呼びかけ：鬼役)

mp「まあだだよ」(答え：隠れる子供)

ff「もう いいかい」(呼びかけ：鬼役)

p「もういいよ」(答え：隠れる子供)

rit.

【発問】「鬼はどんな気持ちで歌うと良いでしょう。」「隠れる子供はどんな気持ちで歌うと良いでしょう。」「隠れる場所を探しているときはどんな感じで歌うと良いでしょう。」「隠れる場所がみつかったときは」「怒鳴らないで遠くに届く声って、どんな声でしょう。」「

かくれんぼ遊びの一連の会話がそのまま歌詞となり、子どもの遊びを題材にした、わらべうた風の曲である。タッカ タッカのリズムを中心とする前半とタン タン タンを中心とする後半が対照的である。

後半2小節ごとに強弱をつけて歌うことにより、鬼と隠れる子どもとの対比、あるいは遠近感を生み出すことができる。かくれんぼをしている様子を表現するためにも「もういいかい」(呼びかけ)「まあだだよ」(答え)を鬼役と隠れる子供役の役割の分担をして、歌ってみると楽しさが溢れる。

指導のポイントは、かくれんぼをしている様子を想像することによって、「もういいかい」「まあだだよ」の1回目、2回目、「もういいかい」「もういいよ」の声の強弱を変化させることにより、鬼役と隠れる子供の役柄における心情を強弱によって表現することが可能となる。強弱や歌い方の変化を付けながら、交互唱の部分を楽しむことができる。

前半は、特に付点のリズムに特徴があり、活発な感じでスキップするなどしてリズムを体得し、歌うと良い。後半は、「まあだだよ」(タッカのリズム)、「もういいよ」(タン タン タン)のリズムの違いに気付かせるように指導を行う。

また、実際にかくれんぼをしながら歌ってみると臨場感に溢れる表現が可能となる。そして、「もういいかい」の部分はだんだん強く(*mf*→*f*→*ff*)、「まあだだよ」の部分はだんだん弱く(*mf*→*mp*)、「もういいよ」は弱く(*p*)、ゆっくり(*rit.*)と表現の工夫を行う。

第6曲目「虫のこえ」(文部省唱歌)

かしのかんじを生かしてうたいましょう。

文部省発行の「尋常小学読本唱歌」(明治43年)に掲載された。昭和17年の「初等科音楽」で一時削除されたが、昭和22年「2年生のおんがく」に復活し、原曲では、2番が“キリキリキ

リキリきりぎりす”となっていたが、“こおろぎや”に改められている。

「虫のこえ」 グループ分け

- | | | | |
|------------|--------|--------|-----|
| 1. あれ まつ虫が | ないて | いる | A |
| チンチロ | チンチロ | チンチロリン | B |
| あれ | すず虫も | なき出した | A |
| りんリン | リンリン | リーンリン | B |
| あきの | よながを | なきとおす | A・B |
| ああ | おもしろい | 虫の こえ | A・B |
| | | | |
| 2. キリキリ | キリキリ | こおろぎや | A |
| ガチャガチャ | ガチャガチャ | くつわ虫 | B |
| あとから | うまおい | おいついて | A |
| チョンチョン | チョンチョン | スイッチョン | B |
| あきの | よながを | なきとおす | A・B |
| ああ | おもしろい | 虫の こえ | A・B |

【発問】「どんな虫が出てきましたか?」「まつ虫は、どのような声で鳴きますか?」「すず虫は、どのような声で鳴きますか?」

「こおろぎ、くつわ虫、うまおい、(後半部分は)、どのような気持ちが表れていますか?」

ハ長調、4分の2拍子、前半の6小節(2回繰り返す)、後半の8小節の2つの部分からなる。

秋の夜、草むらで美しい声で鳴いている虫の声を模倣した擬音“チンチロチンチロチンチロリン”“リンリンリンリンリーンリン”“ガチャガチャガチャガチャ”“チョンチョンチョンチョン”などの擬声語が面白く、歌い方を工夫し、身の回りの楽器や音素材を使って遊ぶことができる。

教材としては、前半の繰り返しの部分は、1匹の虫に耳を傾けている気持ちで、虫の鳴き声を想像しながら、表情豊かに歌う工夫をさせる。後半では、「ああ おもしろい」のクライマックスに向けて、のびやかな声で歌わせることが大切である。

2番の「キリキリ」と「うまおい」は、リズムに気を付けて、言葉をはっきりと歌えるようにする。

Aグループの歌を歌う子供(大勢)とBグループの虫の声を表現する子供(少人数)に分かれて、歌のバックに虫の鳴き声を入れることも楽しい。虫の鳴き声で、前奏や間奏をつくることもできる。全体で約束事を決めて音を出したり、グループで工夫したりして、幅広く取り組むことができる。

鳴き声の部分を階名唱し、「ソ」と「ラ」の読

譜に慣れさせることも必要である。

指導のポイントは、虫の声が聞こえる静かな秋の様子や虫の声を楽しんで聴いている人の気持ちを想像できるように、言葉を大切に音読することが重要である。さらに秋の夜長に聞こえてくる虫の声を想像しながら、歌声で表現する楽しさを味わえるようにする。

歌詞の内容を理解し、前半の虫の声の面白さと後半の“ああ、おもしろい”の曲の山場を意識して、気持ちを込めて声を遠くに響かせ、のびやかに歌う。

また、それぞれの虫の鳴き声の違いを出すために、声の出し方を工夫して歌えるようにする。

子どもたちがイメージを膨らませられるように、秋の様子や虫の写真、映像なども使う。子どもたちの経験を活かし、実際に見たことがある虫をあてはめて歌うことも可能である。

歌詞の擬声語の響きを生かして、旋律やフレーズを聴き取り、情景に合った表現で、自分の歌声や発音に気を付けて声の出し方を工夫することが最も大切である。

第7曲目「夕やけこやけ」

中村雨紅作詞・草川信作曲

かしのようすをおもいうかべながらうたいましょう。

ハ長調、4分の2拍子。大正12年、「新しい童謡(一)」に「夕焼小焼」として発表された。八王子市の恩方、宮地神社の息子として生まれた中村は、幼時を思い出して作詞している。

「夕やけこやけ」

【夕方家路につく場面】⇒ *mf* 急いで帰る様子

- | | |
|------------|---------|
| 1. 夕やけこやけで | 日がくれて |
| 山のおてらの | かねがなる |
| おててつないで | みなかえろ |
| からすといっしょに | かえりましょう |

【日没後に月が昇り、星が輝き始める場面】

⇒ *mp* ゆったりと静まり返った状況

- | | | |
|---------|------|-------|
| 2. 子どもが | かえった | あとからは |
| まるい大きな | お月さま | |
| 小とりが | ゆめを | 見るころは |
| 空にはきらきら | 金のほし | |

【発問】夕やけの様子を思い浮かべながら「どんな声で歌うとぴったりでしょうか?」

「夕焼けに向かって歌おう」「みんなの歌声をぴっ

たり合わせて、きれいな声で歌う。」「遠くに届く声で、歌う。」そして、「丁寧な歌い方」「きれいな発声」の中でどのように表現するのかを工夫する。

教材として、1 番の歌詞は、子どもたち自身の経験から、主体的に歌詞に思いをのせていく。2 番の歌詞は、歌の主体・目線が変化し、時間も経過している。1 番と 2 番の歌い方や歌への思いが自然に変わってくると良い。

表 3. 【「夕やけこやけ」の時間設定】

	場面設定	速度・強弱
1 番	夕方家路につく場面のどかな田園風景	急いで帰る様子 <i>mf</i>
2 番	日没後に月が昇り、星が輝き始める場面	ゆったりと静まり返った状況 <i>mp</i>

曲の始まりは、♪♪と単調でのどかな田園風リズムに乗って、美しい旋律を展開する。「夕焼けに向かって歌おう」「夕焼けを見て歌おう」などと、歌声の方向を遠くに広くもつことで、響きのある声で歌うことができる。より自分の歌声に注意し、友達の歌声を聴きながら声を合わせて、心を合わせて歌う気持ちを大切にする。

指導のポイントは、歌詞の情景や気持ちから導き出される声や歌い方を考えながら歌うことが重要である。1 番では、「夕方家路につく場面」と 2 番は「日没後に月が昇り、星が輝き始める場面」が歌われている。歌詞に時間の経過があることに気付き、1 番と 2 番の速度や強弱を変えて歌うなど、情景に合わせた表現の工夫が可能である。さらに、歌詞の内容に合わせて歌う人数を変え、曲の最後はだんだん遅くする工夫も必要である。

主体や目線も変化しているが、子どもたちの生活に根ざしているのも、情景や気持ちを思い浮かべることができよう。2 番は、子供たちそれぞれが情景を実際に絵で描いて、イメージを具体的に表現した上で歌うのが効果的である。

旋律は、1 か所付点のリズムがあり、山場と合致し、特徴となっている。従って、意識して表現に結び付けることができよう。また、声の方向や響きに気をつけ、友達と聞き合いながら、声を合わせて歌う意欲を育てることが可能となる。

旋律は、大きく 4 つのフレーズで構成されている。全体で丁寧に歌うことも大切にしながら、一人や少人数でフレーズごとに「リレー歌い」をすることで、より「丁寧な歌い方」「きれいな発音」

を意識させることができる。さらに、声の方向や響きに気を付けて、声をそろえて歌うことを大切にする。

歌詞の表す情景や気持ちを想像し、声の音色、旋律、強弱や速度を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、声の出し方や表現の仕方を工夫しながら、どのように歌うかについて研究を深めることが重要である。

第 8 曲目「春がきた」(文部省唱歌)

高野辰之作詞・岡野貞一作曲

みんなできもちをあわせてうたいましょう。

ハ長調、4 分の 4 拍子。a - a' の一部形式。

「春が きた」

くりかえし【反復】

- | | | |
|---------|-------|------|
| 1. 春がきた | 春がきた | 呼びかけ |
| どこにきた | | |
| 山にきた | さとにきた | こたえ |
| のにもきた | | |

くりかえし【反復】

- | | | |
|---------|-------|------|
| 2. 花がさく | 花がさく | 呼びかけ |
| どこにさく | | |
| 山にさく | さとにさく | こたえ |
| のにもさく | | |

くりかえし【反復】

- | | | |
|----------|-------|------|
| 3. とりがなく | とりがなく | 呼びかけ |
| どこでなく | | |
| 山でなく | さとでなく | こたえ |
| のでもなく | | |

【発問】「歌詞を声に出して読んで、何か気付いたことがありますか?」「旋律のリズムも繰り返していますね」「歌詞は呼びかけている人と、答えている人がいますね。では、二つに分かれて読んでみましょう。」

この作品は、旋律に春の訪れを喜ぶ明るい雰囲気溢れている。歌詞は、「春がきた 春がきた どこにきた」とリズムよく繰り返されており、子どもたちが互いの声を聴き合うことを通して、声を合わせて歌う楽しさを感じ取ることができよう。また、この作品では、さらに心を合わせて歌おうとする主体性や意欲を育てることが可能である。

二つのフレーズは同型のリズムで、7 小節目が山になっている。♪ ♪ ♪ ♪ のリズムを繰り返しながら、音の高さが上昇していき、7 小節目の山の後、なだらかにまとめられている。

教材としては、旋律のリズムの繰り返しの心地良さが、この曲に親しみを感じさせる効果を生み出している。そのリズムの繰り返し共に、旋律が上行下行しており、自然に強弱変化を付けることができる。

旋律の流れと歌詞の様子、そして子どもの思いとの関連を図りながら、音楽表現に繋げることが大切である。

春を迎える喜びを想像したり、春の情景やイメージを交流したりする。その際は、写真や絵などを用意しても良い。歌詞を音読して、言葉が繰り返していることにも気付かせることも大切である。

旋律をリズム打ちして、同じリズムが繰り返されていることを気付かせる。言葉の繰り返しと旋律の反復との関わりについても理解を深める。

1 番には、「きた」という言葉が6 回使われている。

例えば、教師が「春が」と歌い、「きた」のところだけを、子どもたちが歌うようにすることで、6 回使われている「きた」の旋律の違いを比べながら歌うことができる。

後半のフレーズが上昇していくことによる曲想を感じ取らせる。最後の山を自然に歌えるような発声を工夫する。二部合唱や鍵盤楽器での合唱奏に取り組んでも良い。

指導のポイントは、歌詞を朗読し、言葉の繰り返しに気付いて、どのように歌ったらよいかイメージを膨らませる。そして、言葉の繰り返しと、旋律のもつ「♪」のリズムの繰り返しが関連していることにも気付いて歌うことが大切である。また、「気持ちの高まり」と「音高の変化」の関連にも児童自らが気付くように促し、歌い方を工夫する。

尚、全体を前半・後半に分けると、4 小節ずつ同じリズムの繰り返しになっている。「呼びかけとこたえ」の歌詞に合わせて、4 小節ずつ交互に歌ってみると、「呼びかけ」と「答え」のお互いの歌声を聴き合いながら、曲想に合った歌い方や声の出し方を考え、工夫することができよう。

〔第3 学年〕

第9 曲目「春の小川」(文部省唱歌)

高野辰之作詞・岡野貞一作曲
音の高さに気をつけて、明るい声でうたいましょう。

大正元年、「尋常小学唱歌(四)」に掲載された曲である。この時は、「春の小川は、さらさら流る」で始まる3 節のまでの歌詞で構成されてい

た。

昭和17 年の「初等科音楽(一)」に掲載される際に、「春の小川はさらさら行くよ」と口語体に修正され、同時に3 節目の歌詞がカットされている。

「春の小川」

二部形式

1. 春の小川は	さらさら行くよ	a
岸のすみれや	れんげの花に	a'
すがたやさしく	色うつくしく	b
さけよさけよと	ささやきながら	a'
2. 春の小川は	さらさら行くよ	a
えびやめだかや	小ぶなのむれに	a'
今日も一日	ひなたでおよぎ	b
あそべあそべと	ささやきながら	a'

【発問】“さらさら” “やさしく” “いろうつくしく” という歌詞から、「どんな様子が思い浮かぶでしょうか?」「どのような感じで歌うと良いでしょうか?」

この作品は、歌詞を朗読することによって、穏やかで色鮮やかな春の様子を表している歌詞と滑らかな旋律で明るい曲想が関わっていることを、写真や身近な春の景色を思い起こして、子供たちの発言を生かして、気付かせることが最も重要である。

また、流れを感じる旋律と歌詞に描かれている春の情景を感じながら、それにふさわしい明るく自然で無理のない声で歌うように心がけることが大切である。特に、3 段目は、3 小節目の高い“ド”に向かって上行するなど、旋律の特徴を捉えて表現を工夫する。

指導のポイントは、旋律やフレーズを意識し、息継ぎをするところを確認する。また、優しくなめらかに歌うために、歌詞の内容を理解し、特に「さらさら」という歌詞から情景を思い浮かべながら歌うように心がけ、歌詞の表している情景や、曲想に合った歌声について考えて歌うことが最も重要である。

第10 曲目「茶つみ」(文部省唱歌)

曲のかんじを生かしてうたいましょう。

「尋常小学唱歌(三)」(明治45 年)に掲載されて以来、広く歌い継がれてきた。

ト長調、4 分の4 拍子。A(a b)-B(a c)の二部形式。

歌詞は、爽やかな初夏の頃、茶摘みをしている

人々の姿が見える茶畑の様子を描いたものである。

初夏の爽やかな時期の茶畑で、茜だすきにすげの傘を付けた女性たちが、手作業をしている様子などを、教科書の写真や挿絵、歌詞の内容から考えたり、想像したりする。

「茶つみ」

1. 夏も近づく八十八夜 (呼びかけ)
野にも山にもわかばがしげる (答え)
あれに見えるは茶つみじゃないか (呼びかけ)
あかねだすきにすげのかさ (答え)
2. ひよりつづきの今日このごろを (呼びかけ)
心のどかにつみつつ歌う (答え)
つめよつめつめつまねばなるぬ (呼びかけ)
つまにゃ日本の茶にならぬ (答え)

【発問】「みんなは家で、お茶をよく飲みますか？」
「お茶は、このような畑で育つんですね。葉っぱを摘んで、お茶を作ります。どのような歌い方で歌うと、表現できると思いますか？」

4小節を1フレーズとするリズムパターンが3回繰り返され、4回目にリズムの変化が見られる。

旋律は、四七抜き音階（ファとシを除く）で、日本らしい響きを生み出している。この「茶つみ」は、「手合わせ」遊びを付けて歌い親しまれてきた音楽である。「呼びかけ・答え」「呼びかけ・答え」のようにつくられた二部形式で、第4フレーズで頂点を形成し、リズムも少し変化している。

教材として、教科書の写真や挿絵、資料などを活用して理解を深めさせて、情景を思い浮かべて歌うように促す。歌詞や写真から思い浮かぶ初夏の情景と旋律の特徴を手掛かりに、どのような歌い方をすればよいかをイメージを膨らませて歌唱表現に取り組むようにする。

6小節目と7小節目の音の違いを気付くように促す。また、フレーズの最後の4分休符の間の取り方が曖昧にならないよう、拍にのって歌うことがとても大切である。従って、フレーズの最初の休符や、拍を感じ取らせるために、手合わせ遊びをしながら歌うことも有効である。

指導のポイントは、軽やかな感じのするリズムの反復と、中音域から高音域の多くの跳躍音が各フレーズからなる大きなまとまりを大切にしながら、明るく透明感のある声で歌うように心がけるとよい。

また、拡大写真や映像などを示し、歌詞の意味を理解させると共に、できるだけ情景を思い浮かべて、のびやかな声で歌うことが重要である。また、お茶を楽しむ生活習慣についても、お互いに話し合う時間を持つと、全員で歌う際に表現が豊かになる。

段ごとに大きなフレーズになっており、どのフレーズも最初と最後が4分休符となっている。この休符の部分に「トントン」と“掛け声”を入れて歌うとより楽しさを表現することが可能となる。

つまり、フレーズ初めの4分休符の部分を手で打つことにより、拍を感じ取る心地よさを味わうことができよう。さらに、手遊びをしながら、自然な明るい声で歌えるように心がける。

また、1段目と3段目は、同じ旋律で、2段目もリズムは同じである。4段目の盛り上がりを感じ取りながら歌うことが大切である。さらに、旋律のリズムやフレーズを感じて、拍にのって生き生きと歌うことが最も重要である。

8つの4分休符を手拍子でリズムを感じながら歌うと、休符の面白さにも気付かせることができよう。

友達との手合わせや体を動かす活動を行うと良いコミュニケーションが取れ、協力して一つの作品を作り上げる達成感を味わうことができよう。

二人組みで手合わせをする際は、「4分休符の際に両手を合わせるようにする」という取り決めをしておく、活動が上手く進みやすい。また16小節目を歌う際は、最後の4分休符で手を合わせることを意識させておくと、音を十分に伸ばしながら歌うことができよう。

歌詞の内容を各自で理解し、新緑の美しさや新茶を喜ぶ気持ちを歌で表現することが大切である。

歌詞の内容と、旋律やリズムの特徴を関連させながら、歌い方の工夫を学級全体で考え、実際に試しながら表現を工夫するように心がける。

また、旋律やフレーズを生かすにはどんな歌い方が良いかについて意見を出し合い、歌い方を工夫する。そして、工夫した表現を生かして、明るい声でのびのびと歌うことが大切と言えよう。

第11曲目「うさぎ」(日本古謡)

日本に古くからつたわる曲のふんいきをかんじとって歌いましょう。

江戸時代から歌われてきた歌の一つである。明治25年、「小学唱歌(二)」に初めて教材として

掲載された。当時は“何見てはねる”の歌詞が“何をみてはねる”となっていたが、昭和16年、「ウタノホン（下）」で現在のような形に改められた。当時の人たちが身近な自然環境に親しみをもって、素朴に歌った心情がよく伝わってくる。

日本古謡、原曲は、江戸時代の箏曲。特徴は、4分の2拍子。歌詞も含め前半が呼びかけ、後半がこたえの形になっている。教材として、問答形式なので、交互唱で歌い方を工夫することもできよう。日本の旋法の醸し出す雰囲気を感じ取ることが大切である。

「うさぎ」 音楽の仕組み「問いと答え」
うさぎ うさぎ (呼びかける役)
何見て はねる
十五夜お月さま (答える役)
見て はねる

【発問】「十五夜を知っていますか?」「お月見をしたことがありますか?」「うさぎさんに話かけるように歌ってみよう。」「曲の終わりはどんな感じで歌うとよいでしょう。」

この曲は、わが国の伝統的な音感覚に根差した音楽である。旋律は、伝統的な音階によってできおり、曲全体から醸し出される日本の音楽の雰囲気を味わうことができよう。

歌詞は、十五夜（旧暦の8月15日の夜）の月が明るく美しく輝いていることを歌ったものである。

昔の人たちが四季折々の様々な自然や情景を詩的な感性で楽しんでいたことに思いをはせて歌うことができる。

言葉に抑揚が付き、歌となって伝わってきたものである。一つ一つの言葉を大切にしながら、柔らかな自然な歌声で歌うことができる。うさぎに問いかけるように歌ったり、それに答えるように歌ったりすることで、情景を思い浮かべながら曲想にふさわしい歌い方を工夫することができよう。

古くから歌い継がれてきた日本のうたの一つである。月のうさぎの餅つき伝説は、日本独自のものである。昔の人々の思いや曲の背景に触れることで、情景を想像しながら表情豊かに歌うことが大切である。

指導のポイントは、歌詞を音読し、季節や様子を想像しながら、どのように歌ったらよいかイメージを膨らませることが重要である。また、日本固有の音階でできている旋律の雰囲気を感じ取

り、2小節ずつのフレーズを生かして話かけるような歌い方を工夫すると良い。

尚、全体を前半・後半に分けると、歌詞が4小節ずつで「呼びかけ」と「こたえ」になっている。歌詞に合わせて、4小節ずつ交互に歌い合うお互いにコミュニケーションが取れ、楽しく歌うことができよう。

従って、情景を思い浮かべ、話しかけるような歌い方を心掛けて歌うようにする。そして、歌詞を手掛かりに、「呼びかけ」と「答え」の旋律になっていることを児童に気付かせる。

さらに、学級を半分にして二つのグループで歌う工夫や、二人組で役割分担をしながら歌うことで、音楽の構造に関する理解も深めていくことができよう。

また、一人や少人数で、一フレーズをリレーして歌うことにより、一つ一つのフレーズを十分に理解して、意識して丁寧に歌うことが可能となる。

「みてはねる」の旋律は、一定の速度で歌うだけではなく、様々な歌い方を考え、試すことで、児童独自の自由な発想を生かせるような場面を設定することが重要である。

旋法の特徴を感じ取り、旋法の違う旋律でも歌うことで、児童が気付いたことを話し合う活動なども取り入れることができ、児童・生徒の主体的な活動を進めることができよう。

さらに、旋律がいくつのフレーズでできているかを考えることで、色々な意見に分かれることが予想されるが、それぞれの考えを全員で試しながら、音楽表現に繋げることも大切である。

第12曲目「ふじ山」文部省唱歌。

作詞は、巖谷小波。

曲の山をかんじながらうたいましょう。

「尋常小学読本唱歌」（明治43年）に「ふじの山」として掲載された。「尋常小学唱歌（二）」（明治44年）では、「富士山」と表記されている。

日本一高く、美しい形をした「ふじ山」は、日本を代表する山として親しまれている。美しく、堂々としたふじ山の姿に、昔から多くの人が憧れを持った。

そして、今日、ユネスコの世界文化遺産の一つとして、世界中で、良く知られている。

ハ長調、4分の拍子。4小節を1フレーズとした、A(a b)-B(c d)の二部形式。

指導のねらいは、日本の象徴的な山である富士山の雄大で美しい姿を想像しながら、曲想を生か

して歌えるようにする。さらに、自然な強弱の変化や、特に曲の山の盛り上げ方を工夫して表現できるようにすることである。

歌詞の擬人法を用いた比喻表現の中には、「かみなりさまを下に聞く」や「かすみのすそを遠く引く」などは、教科書の写真などを見ながら、指導者が説明を加えながら、児童がその状況や様子を思い浮かべやすくする。

「ふじ山」		七五調のリズム	
1. 頭を雲の	上に出し	7 + 5	情景
四方の山を	見下ろして	7 + 5	情景
かみなりさまを	下に聞く	7 + 5	情景
ふじは日本	一の山	7 + 5	心情
2. 青空高く	そびえ立ち	7 + 5	情景
体に雪の	きものきて	7 + 5	情景
かすみのすそを	遠くひく	7 + 5	情景
ふじは日本	一の山	7 + 5	心情

【発問】「みんなは富士山を見たことがありますか?」「知っていることを発表しましょう。」「日本一高い山、堂々とした山のことを歌う時は、どんな歌い方で歌うと良いでしょう?」

指導のポイントは、この歌の歌詞は、擬人法（人間でないものを人間になぞらえて表現する修辞法。）により、富士山の雄大さをより親しみやすいものとして巧みに表現している。1, 2 番共に 1～3 文節目までは、“雄大にそびえる富士山の様子”を表し、4 文節目は、“日本を象徴する富士山を誇らしく思う心情”が表されている。

歌詞の内容を理解し、富士山の雄大な景色に共感して、明るくのびやかな声で歌うことが重要である。

自然で、無理のない歌い方を身に付けるために、歌詞の内容の理解を深め、友達と気持ちを合わせ、笑顔で歌うことが大切である。

歌い出しは、1 番 2 番とも母音「ア」である。富士山の大きな写真や、実際に近隣の山々を見たりしながら、遠くの山へ声を伝えるイメージを持つことで、歌声を遠くへ響かせる感覚をつかむことができよう。

富士山の雄大な姿を表す歌詞が、旋律の音の上がり下がりにも表れているため、歌詞の表す情景を想像しながら、曲想を感じ取って、のびのびと歌うことができる。また、旋律のまとまりや曲の山を捉えやすく、上行、下行する旋律の特徴を富士山の姿に重ね合わせると、強弱を工夫しながら

自然と歌い上げることができる。

3 段目まで各フレーズが同じリズムで始まり、まとまりを感じやすい。最後の段だけリズムが変わり、最高音ハから始まって盛り上がり築いている。

教材として、歌詞の表す情景を思い浮かべ、気落ちを込めて表現する。歌詞や旋律の流れ、盛り上がりを生かした表現を工夫する。

教科書の写真なども使い、情景を思い浮かべやすいように授業の手立てを工夫する。遠くに響くような声を、子どもたち自身に自覚させる。声の出し方を工夫する。また、体の力を抜いたり、喉の奥を開くことを意識したりする。高い山に向かって呼びかけるような、遠くに届くような歌声を探して歌う。

曲の山（一番力強く歌いたいところ）について考える。範唱を聴きながら、「一番力強く歌いたいところ」で拍手をする。二人組になって手を繋ぎ、旋律の音の高さを表しながら歌うのも良い。

歌詞の「富士は日本一の山」を手掛かりにするだけではなく、音楽を形づくっている要素に注目して、旋律の音の高さや 2 分音符のリズムが使われていること、旋律がだんだん上がって、そしてだんだん下がっていくことなどをよりどころにしながら、考えていけるように働きかける。

一番力強く歌いたいところを表現するには、どのような歌い方があっているのかを考えたり、実際に試したりする。

実際に自分で歌うと、旋律が上行しているときには、crescendo. 下行しているときは、decrescendo. の気持ちで歌いたくなることに気付くことができる。

曲の山を生かした歌い方を工夫するためには、このような気持ちが一番盛り上がる場所を探すことから始めるとよいでしょう。

歌ったり歌詞を読んだりする活動を通して、気持ちの盛り上がりや動きを探り、曲の山の歌い方を工夫しながら、表現力を豊かにする。

このように、「曲の山」を捉える学習活動は、旋律の特徴に関心のある子供たちの視野を音楽の要素全体へ広げていくことができよう。

〔第 4 学年〕

第 13 曲目「さくらさくら」（日本古謡）

歌詞の表す様子を思い浮かべながら歌いましょう。

日本の代表的な旋律として楽国にもよく知られている。旋律は、近世箏曲のもので、明治 21

(1888)年に刊行された「箏曲集」(文部省音楽取調係撰)に収められている。元の歌詞は、下記の通りである。

さくら さくら 弥生の空は 見渡すかぎり
霞か雲か 匂いぞ出ずる
いざや いざや 見にゆかん

昭和16(1941)年、国民学校の音楽教科書「うたのほん下」(初等科第2学年用)に現在のように、改訂して入れられ、同33(1958)年の学習指導要領以降、共通教材となった。

旋律の構成は、a(2)b(4)b(4)a(2)c(2)で形式も整っている。美しい陰音階の旋律を味わいながら、気持ちを込めて歌えるようにする。旋律の上行や下行に合わせて、自然な強弱変化を付けて歌えるようにする。日本に古くから伝わる陰音階の旋律を感じてうたえるようにする。日本の伝統音楽を大切にすることを育むことができよう。音階は、陰音階(都節音階)

「さくら さくら」

さくら さくら	a a
野山も里も	b
見わたすかぎり	
かすみか雲か	b
朝日ににおう	
さくら さくら	a a
花ざかり	c

日本古謡として世界的に親しまれている「さくらさくら」は、江戸時代から歌い継がれてきたものである。当時は「咲いた桜」という題名で、「さいたさくら 花見て戻る 吉野はさくら 竜田はもみじ 唐崎の松 ときわ常盤 深緑」と、様々な自然の美しさ歌われていた。

音読を通して歌詞に親しむことが大切である。

歌詞の音読を通して、言葉のまとまりやリズムに親しみ、子音などの発音を意識できるようにする。

言葉の意味を考えた読み方や強弱をつけた読み方などを紹介することで、歌い方の工夫に繋げるようにする。また、歌詞の様子にふさわしい音読の仕方を工夫し、音読の工夫を生かして曲全体を歌い、どのような歌い方がよいかを試す。

歌詞の表す様子を思い浮かべながら気持ちを込めて歌うように心がける。

【発問】「今まで見た桜で一番きれいだったのはど

この桜でしょうか?」「どのような声で歌うと、この詩を生かすことができるでしょうか?」「歌詞を声に出して読んでみましょう。」「リズムに乗って、読んでみましょう。」「(1番・2番・3番それぞれ)「どんな様子を表しているのか想像してみましょう。」「歌詞には、どのような色がありますか?」「どのような歌い方が合うでしょうか?」

歌詞を朗読する際には、語感を大切にして、なるべく縦書きの歌詞を音読する。「さくらさくら」の旋律は、「ミ・ファ・ラ・シ・ド」の五つの音で作られている。日本に伝わる音階の雰囲気を感じ取りながら歌うようにする。

指導のポイントは、桜は日本の春を象徴する花であり、身近に咲いていることも多い。子どもたちの生活に身近な桜の花が、昔から人々に愛されてきたことや、日本を代表する花として海外に知られていることを踏まえながら、日本の音階からなる旋律の雰囲気を感じ取って歌う。また、どんな感じの声で歌ったらよいかを考えて歌うことが大切である。

曲想と旋律の特徴や歌詞の内容との関わりに気付き、発音や呼吸の仕方に気を付けて、自然で無理のない声で歌う。さらに、曲想と旋律の特徴や歌詞の内容との関わりについて考え、曲の特徴を捉えた表現の仕方について発言したりしながら、それを歌い方に生かそうとしている。

歌詞の発音や呼吸の仕方に気を付けて、曲想にふさわしい自然で無理のない歌い方で歌う技能を身に付けて歌う。また、「さくらさくら」の曲想にふさわしい自然で無理のない声で、歌詞の発音や響きのある歌い方に気を付けて歌うことが大切である。

第14曲目「まきばの朝」(文部省唱歌)

船橋栄吉作曲

歌詞の表す様子を思い浮かべながら、のびやかな声で歌いましょう。

歌詞に歌われた牧場は、福島県岩佐郡鏡石町の岩瀬牧場で、作詞者は、朝日新聞記者で随筆家である杉村楚人冠(1872-1945)である。

ハ長調 4分の4拍子 a-b-c-d コーダの形式。abc はいずれも半終止。

教材として、歌詞の内容を理解し、表している情景についてイメージを膨らませ、曲想を生かして歌う。各段の旋律がそれぞれ異なることを、「春の小川」の既習曲と比べながら気を付けるようにする。

また、最後の4小節のコーダ部分は、どのような効果があるのかも考えながら、歌唱表現へと繋ぐことが重要である。

「まきばの朝」

【日の出の前の霧が立ち込めた牧場】

1. ただ一面に	立ち込めた	7 + 5
まきばの朝の	きりの海	7 + 5
ポプラ並木の	うっすりと	7 + 5
黒い底から	勇ましく	7 + 5
かねが鳴る鳴る	カンカンと	7 + 5

【羊の群れがいる霧の牧場】

2. もう起きだした	小舎小舎の	7 + 5
あたりに高い	人の声	7 + 5
きりに包まれ	あちこちに	7 + 5
動く羊の	いく群れの	7 + 5
すずが鳴る鳴る	リンリンと	7 + 5

【朝焼けに染まった牧場】

3. 今さしのぼる	日のかげに	7 + 5
夢からさめた	森や山	7 + 5
あかい光に	染められた	7 + 5
遠い野末に	牧童の	7 + 5

【発問】 この歌はどんな場所や時間を表しているでしょう？「歌詞を声に出して読んでみよう。」「リズムにのって読んでみよう。」(1番・2番・3番それぞれ)「どんな様子をあらわしているのか、そうぞうしてみよう。」「歌詞に色の名前が出てくるところがあるね。それぞれ何色がでてきているかな。」

「どんな歌い方が合うかな？」

牧場の朝の爽やかな情景を、時間の経過とともに絵画的に表現した歌である。時間や景色の移り変わる様子が色彩豊かに表されるとともに、牧場の鐘、羊の鈴、牧童の笛の音が擬音語で表されている。早朝から日の出までの様子の移り変わりや、広い牧場に響く音色をどのように表現するか、思いや意図をもって歌い方を工夫することができる。

語感を大切にし、言葉をはっきりと発音して歌う。「まきば」「きり」「ポプラ」「いさましく」日本語の語感を生かしたまとまりのある旋律である。

歌詞をもとにフレーズを捉えて、拍を感じながら息つぎの仕方に気を付け、のびやかな声で歌うことを目標とする。そして、母音、子音、濁音、

鼻濁音などの日本語の良さを生かした発音や語感に気を付けて歌う学習に適している。

1番の「霧の海」は、ほんやりとした霧のように、次の3番の「ゆめからさめた」は、森や山が目覚めた感じが伝わるように、はっきりと歌う。

従って、語感を大切にし、言葉をはっきりと発音して歌う。また、歌詞の表す情景を想像し、発音やフレーズを意識しながらのびやかな声で歌う。

さらに、発音に気を付けて歌うことも大切である。

子音と母音に気を付けると、歌詞をはっきりと発音することができる。口の形に気を付けて母音だけで歌、声を出さずに息を素早く吐き、子音だけで歌うことも効果的と言えよう。

表4. 【発音の仕方】

カ行	息を強く、素早く吐く。
サ行	息を強く、素早く吐く。
ハ行	息を強く、素早く吐く。
タ行	舌を上歯に付けて息を素早く吐く。
ナ行	小さい「ン」をつけるように発音する。
マ行	唇をしっかりと閉じてから小さい「ン」をつけるように発音する。
ヤ行	小さい「イ」を付けるように発音する。
ワ行	小さい「ウ」を付けるように発音する。
バ行	唇をしっかりと閉じてから発音する。
パ行	唇をしっかりと閉じてから発音する。

指導のポイントは、歌詞の内容から情景を思い浮かべ、曲想を生かして表現することが目標となる。

従って、牧場の朝の情景を想像しながら、強弱変化を付けて歌えるようにする。

また、歌詞を理解して歌うとともに、ブレスに気を付け、のびのびとした旋律を生かして歌うようにする。つまり、それぞれの言葉とフレーズとの関わりを感じ取りながら歌うことが大切である。

第15曲目「とんび」

葛原しげる作詞・梁田貞作曲
せりつのとくちょうを生かして歌いましょう。

ハ長調、4分の4拍子 A(a a') -B(b a")の二部形式。葛原しげる作詞、梁田貞作曲の「とんび」は、小学校学習指導要領で、第4学年の歌唱共通教材に指定されている曲の一つである。歌詞や旋

律の動きに合わせて表現を工夫することが、主な学習活動となる。

跳躍の多いのびやかな旋律が、とんびが風によって気持ちよく飛ぶ様子とよくマッチしている。

旋律は、ファとシを除く五音音階でつくられている。

「とんび」(五音音階)

【誰かがとんびに呼びかけている】

1. とべとべ とんび 空高く
なけなけ とんび 青空に
ピンヨロー ピンヨロー 呼びかけ *f* 答え *p*
ピンヨロー ピンヨロー 呼びかけ *f* 答え *p*
たのしげに 輪をかいて

【とんびが実際に飛んだり鳴いたりしている】

2. とぶとぶ とんび 空高く
なくなく とんび 青空に
ピンヨロー ピンヨロー 呼びかけ *mf*
ピンヨロー ピンヨロー 答え *p*
たのしげに 輪をかいて

【発問】「1番と2番のとんびの様子の違いを見つけましょう。」「旋律の音の上がり下がりに合わせて歌いましょう。」

旋律の音の上がり下がりに合わせて手を動かしながら歌うなどし、音の高さを手の位置で表すことを通して、同じ旋律型の反復や、滑らかな旋律の音の動きに気付くようにする。また、階名唱をして、音高を意識して歌うようにする。旋律の音の上がり下がり合う強弱の工夫することが大切である。

「曲の山」では、旋律の音が高くなって気落ちが盛り上がったたり、強弱が強くなったりすることを思い出して、「とんび」の曲想表現に生かすようにする。

「旋律がどのように上がったたり、下がったりしているかな」

ドーレミソラソ ドーラー ソーミラソミドレー 楽譜の1段目、2段目、4段目にクレシェンドとデクレシェンドがついているが、その効果を歌って確かめることで、強弱を工夫する良さを実感することが重要である。(クレシェンド：だんだん強く、デクレシェンド：だんだん弱く)

【発問】「クレシェンド」や「デクレシェンド」を生かしながら歌ってみよう。「とんびは何羽いるでしょうか?」「3段目のとんびの様子を想像して、歌い方や強弱を工夫して表現しよう。」

「ピンヨローと4回鳴き声が聞えますが、とんびは何羽いるのでしょうか。」という発問で、とんびの様子をより具体的に想像し、「呼びかけ」と「答え」を参考に、3段目の強弱を工夫していくようにする。

また、3段目の鳴き声の部分の旋律について、イメージされるとんびの様子についてグループに分かれて話し合い、それぞれのグループの意見を確認し合う。

強弱表現については、単に音量を示すのではなく、音楽に表情をつけるためのものである。伴奏譜に強弱記号が示されているが、強弱を無理に付けてうたうのではなく、自然で無理のない響きのある声で、とんびの鳴き声を生き生きと表現するようにしたい。

とんびは、“とび”(タカ目タカ科に属する鳥類の一種)のことで、とんびのゆったりとした飛び方をイメージして歌うことが大切である。

また、とんびは、上昇気流をとらえる能力が高く、回りながら上昇し、また回りながら下降する様子を実際に身体全体で飛び方を感じながら歌うと良い。

「呼びかけ」と「答え」を生かして、情景と表現を結び付けて説明をさせる。一羽なのか、あるいは二羽で夫婦なのか、親子なのか、友達なのか、物語を設定して考えることが重要である。

表5. ピンヨローピンヨロー ピンヨローピンヨロー

1	<i>mf</i> 呼びかけ	<i>mp</i> 答え
2	<i>mf</i> <i>mp</i> 呼びかけ 答え	<i>mf</i> <i>mp</i> 呼びかけ 答え
3	<i>mf</i> <i>decresc.</i> 呼びかけ	<i>mp</i> <i>decresc.</i> 答え

例えば、2羽のとんびが呼びかけあっているように、「呼びかけ」は強く、「答え」は弱く歌う。

また、とんびが近くから遠くへ輪をかいて飛びながら鳴いているので、だんだん弱くする。

教材としては、以下のことに気を付けて指導を行う。第1に、広い大空を悠々と舞うとんびの姿を表すように、のびのびとレガートで歌う。

第2に、上行型ではクレシェンド、下行型ではデクレシェンド、強弱の変化が旋律の動きと一致しており、表現に結びつけやすい。

第3に、第3フレーズに見られる「ピンヨロー」のエコーは、空間の広がりを感じさせる。遠近感を表現するための工夫が必要である。

具体的に、3段目の鳴き声の部分の歌い方や強さについてアイデアを出し合い、発表したそのアイデアを取り入れた歌唱を全員で歌ってみることが大切である。とんびが「どんな風に」や「何と」呼びかけ合っているか想像させることから、歌い方や強弱の工夫へと繋げることができる。

4つのグループに分かれ、3段目の鳴き声の部分の歌い方や強さについて考える。そして、歌い方を理由と共に発表する。

2羽のとんびが飛び交っている様子が描かれているが、親子や友達同士など、とんび同士の関係を想像させることから、どのように呼びかけ合っているのか考えさせる機会となるであろう。

第16曲目「もみじ」(文部省唱歌)

高野辰之作詞・岡野貞一作曲
声が重なり合う美しさを感じて歌いましょう。

日本の代表的な風物詩である紅葉の美しさを歌い、多くの人々に親しまれてきた曲である。また、二部合唱の色々な技法が含まれた編曲により、旋律の重なりや響き合いを味わって合唱することができる。

また、曲のイメージを広げるために、教科書の写真を参考にすると共に、絵葉書や写真などを飾って、「秋の色」に模様替えした教室で歌ってみたり、紅葉の景色を映像で見たり、実際に紅葉した木々を眺めたりしながら歌ってみたりなど、子供たちが季節を感じ、曲の世界を楽しめるような工夫を試みてみたいものである。

歌詞の朗読では、リズムのよい歌詞を声に出して読むことで、歌詞の醸し出す雰囲気をつかみ、歌詞の内容を理解する。

指導者が語感を生かし表情豊かに読む後を追って子供たちが読む活動も有効である。語感を生かして歌うために、語感を感じて読むようにする。

文部省唱歌、へ長調、

4分の4拍子、A(a a')-B(b c)の二部形式。

「もみじ」

1. 秋の夕日に照る山もみじ 前半：山全体
こいもうすいも数ある中に
松をいろどるかえでやつたは 後半：視線が
山のふもとのすそもよう 山の麓へ
2. たにの流れに散りうくもみじ
波にゆられてはなれて寄って
赤や黄色の色さまざまに

水の上にも織るにしき

【発問】「1番の歌詞：きれいな色が見えますね。どこでしょう?」「歌詞を声に出して読んでみましょう。」(1番・2番それぞれが)「どんな様子を表しているのか、想像してみましょう。」「1段ごとに、パートの関わり方を確認してみましょう。」「どんな声で歌ったらいいでしょうか?」

教材は、歌詞の内容を理解し、表している情景についてイメージを膨らませ、季節を感じて歌う。声部の役割を理解し、旋律の重なりや響き合いの楽しさを感じ取って二部合唱する。

詩を読んだり、範唱を聴いたりして、情景を思い浮かべ、様子などを感じ取らせることが大切である。

1番と2番の情景の違いを捉えさせるための手掛かりとして、「秋の夕日に照る山紅葉」と「谷に流れに散り浮く紅葉」を対比させる。

また、難解な語句については、教科書の注釈をもとに理解を深めると良い。

歌詞の内容を理解し、秋の美しい様子に共感して、明るくのびやかな声で歌う。そして、何よりも身体を楽器としてストレッチ体操などで身体をほぐす準備し、十分に呼吸をする。歌い出しは、1番、2番ともに母音が「ア」であることを意識して歌うことが大切である。

そして、2番の歌詞：秋も終盤になりもみじが散って川に流れ、「ゆられて」「はなれて」「よって」いる、動きのある様子が表されている。

また、「すそもよう」や「にしき」など着物にたとえた言葉も我が国の文化を感じるものであることを大切にする。

この詩は、様々なものから秋の美しい山の景色が想像できる。夕日の茜色、もみじの濃い赤や黄色、松の深い緑、かえでやつたのオレンジや茶色など、歌詞から色彩を感じ取り、季節や自然の美しさを歌で表現する楽しさを味わえるようにする。

指導のポイントは、1番と2番の表している情景の違いを意識して表現すると共に、二部合唱の場合は、パート同士の関わり合いに気を付けて歌うように心がける。つまり、追いかけている箇所や、一緒に動く箇所など、各フレーズを大切に歌う。

また、紅葉の写真を掲示し、季節を感じ、美しい情景を想像しながら歌う工夫することが重要と言えよう。

重なり合う声の響きを感じるためには、それぞ

れの旋律のリズムや音程をしっかりと覚えることが大切である。また、音程を整えて、曲想に合った声の出し方や音色を揃える。

リズムや音程、音色について、自分たちで判断したり、確認したりしながら、重なり合う美しさを感じ取ることができるように指導する。つまり、一人一人の歌声を育て、主体的に学習することが、合唱の楽しさに繋がる。

響き合う活動の大切さとして、二つの旋律の輪唱的な重なりを面白さを感じ取るために、明るく響きのある声で揃えて歌うようにする。

旋律の流れに合った自然な強弱を表現することで、二つの旋律を重ねたときに、それぞれの動きの違いを感じることができる。その面白さを感じ取りたい。

また、前半の最後では、追いかける旋律が追いつくことで、声一つにまとまるので、そのタイミングを合わせるようにし、歌声を重ねる楽しさを感じ取らせることが重要である。

VIII. 結論

歌唱共通教材を指導する際には、言葉一つ一つの発音や意味を十分に理解し、日本語の美しさや素晴らしさを感じながら、日本の歌としていつまでも心に残るように歌い継いでいくことが大切である。

「こころのうた」では、特に、歌詞の表す情景や気持ちを想像し、それに合った表現ができるように工夫することが重要である。

従って、言葉一つ一つの発音に気を付け、言葉の意味を感じ取って、日本語の良さや美しさを味わい表現することを特に大切にしたい。

歌詞の朗読では、リズムのよい歌詞を声に出して読むことで、歌詞の醸し出す雰囲気をつかみ、歌詞の内容を理解する。

指導者が語感を生かし表情豊かに読む後を追って子供たちが読む活動も有効である。語感を生かして歌うために、語感を感じて読むようにする。

そして、歌唱における曲想と音楽の構造との関わりを研究し、生かす学習を進めていくことが特に必要である。歌詞の情景と自分の気持ちや経験を重ねて歌うことが大切と言えよう。

また、歌詞の表す情景や気持ちが伝わるような歌い方に興味・関心を持ち、友達と話し合いながら歌う学習に楽しんで取り組むことで、主体性や協働性、創造性を育むことができる。

さらに、歌詞の表す情景や気持ちを想像し、声の音色、旋律、強弱や速度を聴き取り、それらの

働きが生み出すよさや面白さを感じ取りながら、声の出し方や表現の仕方を工夫し、どのように歌うかについて研究を深めることが重要である。

曲想と旋律の特徴や歌詞の内容との関わりに気付き、発音や呼吸の仕方に気を付けて、自然で無理のない声で歌うように指導を重ねることが何よりも大切と言えよう。

歌詞の音読を通して、言葉のまとまりやリズムに親しみ、子音などの発音を意識できるようにする。

言葉の意味を考えた読み方や強弱をつけた読み方などを紹介することで、歌い方の工夫に繋げるようにする。

従って、主体的な学修とは、以下の4点に気を付けながら歌うことが必要である。

- ① 歌詞の様子にふさわしい音読の仕方を工夫する。
- ② 音読の工夫を生かして曲全体を歌う。
- ③ どのような歌い方が良いかを試みる。
- ④ 歌詞の表す様子を思い浮かべながら気持ちを込めて表現する。

これらの曲想と音楽の構造との関わりや、曲想や歌詞の表す情景や気持ちとの関わりに気付き、リズムや旋律の特徴や歌詞の表す情景や気持ちに目を向けるようになったら、その次に特に重要視したいことこそ、その内容を表現することである。

つまり、児童・生徒が自分の歌声や発音に気を付けて歌う技能を身に付けさせるためにも、声はどのようにして作られるのか?という「声が出る仕組み」を理解させることが大変重要である。

児童・生徒の実態を踏まえて、自分の歌声を大切にしながら、作詞者や作曲者の思いや歌詞の内容が相手に伝わるように、表現することが大切である。

つまり、丁寧に歌詞を読み、母音、子音、濁音、鼻濁音に注意して、魅力ある歌声や曲想を感じ取って歌い方を工夫し、丁寧な歌い方や、きれいな発声、そして明瞭な発音の仕方などにも気付くように指導することが必要となる。

さらに、合唱では、旋律の特徴や重なりに興味・関心を深め、友達と協働して、旋律の重なりが生み出すよさや面白さ、美しさを味わって歌う学習に進んで取り組めるよう、指導していくことが必要である。

また、曲のよさや面白さ、美しさや曲の特徴を捉えた表現の工夫について積極的に発言し、友達と聴き合い、声を合わせて歌う学習に粘り強く取

り組めるよう指導を行うことが大切である。

互いの歌声や伴奏を聴いて、自分の歌声だけでなく、友達の歌声や伴奏の響きを良く聴きながら、声を合わせて歌う技能と調和のとれた音楽表現を身に付けることができるよう、指導を行っていく必要がある。

そして、何よりも歌詞の表す様子を思い浮かべながら、身体全体を楽器として捉え、生き生きとした心情で歌うことが、最も重要なことである。

本研究のテーマである「児童・生徒の主体性を育む歌唱指導法」を実践するためには、何よりも児童・生徒の実態を踏まえることが大切である。

そして、児童に「発問」をして、自分の力で考える時間を十分に与えることにより、「自分で考える力」を自然に身に付けることができよう。

さらに、児童・生徒一人一人が、歌詞のイメージを持って表現する力を育成することができよう。

児童が「このように歌いたい」「このように表現したい」という思いを基に、実際に歌って確かめていく過程をより多く取り入れるようにすることが重要と言えよう。つまり、実際に歌うことで、児童・生徒自らが表現を工夫し、その思いがより一層明確となって表現することが可能となる。

従って、指導するに当たって、曲想の感じ取りを深めさせ、必要な発声の技術、発音の工夫などをポイントとして指導することにより、感じ取ったことを基に、色々な表現の仕方を体験できるようになる。つまり、児童・生徒の思いを膨らませて、イメージを具体的にすることで、児童・生徒に歌唱表現を工夫する楽しさを味わわせることができよう。

以上のように、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて、児童・生徒が自ら気付くような指導を工夫することにより、「自分で考える力」を身に付けさせ、歌詞の表す情景や気持ちを想像して歌う学習の中で、リズムや旋律などの特徴や、歌詞の表す情景や気持ちを自ら表現するように主体性・協働性・創造性を育む指導を行うことが最も重要と言えよう。

今後もさらに、児童・生徒が学習の主体となる主体的・協働的・創造的な歌唱指導法に関する研究を進め、特に歌唱指導においては、声を合わせて歌おうという意欲を育て、共に歌う楽しさを味わうことができる音楽指導を行っていくつもりである。

注

1. 文部科学省ホームページ「生きる力」新学習指導要領 Q & A「歌唱共通教材の扱いについて」
2. 国立教育政策研究所教育課程研究センター「指導と評価の一本化」のための学習評価に関する参考資料【小学校音楽】（東洋館出版社、2020年）、pp.4-5.
3. 文部科学省ホームページ「生きる力」新学習指導要領 Q & A「歌唱共通教材の扱いについて」

【主要参考文献】

1. Barbarossa Rino. *Compendio sulla tecnica vocale*. Azzali. Parma 2000.
2. Juvarrá Antonio. *Il canto e le sue tecniche*. Trattato, Ricordi. Milano. 2003.
3. シャーリー・エモンズ／アルマ・トマス著『声楽家のための本番力』曾ちはる訳、音楽之友社、2008年.
4. デイヴィッド・プレア・マクロスキー著『美しい発声法』、高山教子訳、音楽之友社、1939年.
5. フックス著『歌唱の技法』—すぐれた歌唱法への道—、伊藤武雄訳、音楽之友社、1970年.
6. フレデリック・フースラー／イヴォンヌ・ロッド＝マーリング著『うたうこと』発声器官の肉体的特質 —歌声のひみつを解くかぎ— 須永義男・大熊文子訳、音楽之友社、2000年.
7. メリッサ・マルデ／メリージーン・アレン／クルト＝アレクサンダー・ツェラー『歌手ならだれでも知っておきたい「からだ」のこと』小野ひとみ・若松恵子・森薫訳、春秋社、2010年.
8. リチャード・ミラー著『歌唱の仕組み』岸本宏子・八尋久仁代訳 —その体系と学び方—、音楽之友社、2014年.
9. 浅香淳編『歌唱へのアドバイス』（声楽ライブラリー 2）音楽之友社、1983年.
10. 浅香淳編『呼吸と発声』（声楽ライブラリー 3）音楽之友社、1983年.
11. 石井末之助著『声のしくみ』—声を使う人のやさしい音声学入門—、音楽之友社、1974年.
12. 大賀寛著『美しい日本語を歌う』カワイ出版、2008年.

13. 酒井弘著『発声の技巧とその活用法』音楽之友社, 1979 年.

図版

1. Barbarossa Rino. *Compendio sulla tecnica vocale*. Azzali. Parma 2000.
2. <https://velvettino.net/voice-kasure/>
3. https://stat.ameba.jp/user_images/20181121/17/gonxxx0305/bb/df/g/o0630036714307214987.gif
4. https://www.hirotaent.com/img/hukubiku_img01.jpg
5. <https://newscast.jp/attachments/Z0vU1PCQpS2vueLElkel.png>
6. フレデリック・フースラー / イヴォンヌ・ロッド＝マーリング著『うたうこと』発声器官の肉体的特質 ―歌声のひみつを解くかぎ― 須永義男・大熊文子訳, 音楽之友社, 2000 年, p88.
7. Juvarra Antonio. *Il canto e le sue tecniche*. Tratto. Ricordi.Milano 2003.
8. https://stat.ameba.jp/user_images/2013123/2/tk0ptql1/9c/2c/g/o0415028712798016015.gif
9. <https://d1d37e9z843vy6.cloudfront.net/jp/images/3583654/700/33a86644c5bf4839a28eb9b718f002cf1293a36b.jpeg>

